

王政復古政府成立直前の越前藩

——公議政体樹立実現への周旋活動——

轟 和也

一、問題の所在

本稿は王政復古政府成立直前の中央政局における越前藩の動向を明らかにすることを目的としている。

近代国家形成の端緒である王政復古政府成立は幕末期の大きな転換点のひとつであり、これまでの研究蓄積に加え、近年高橋秀直氏・家近良樹氏・原口清氏らによって新たな見解が示され成果を挙げている。⁽²⁾

また、王政復古政府の成立過程や成立後の勢力構造の把握には、その直前の中央政局の政治過程の考察が必要不可欠であり、先行研究においても「薩摩倒幕派と徳川勢力との関係は緊張が一貫して高まり続けるといった単線的なものではなく、王政復古クーデター前においてはその対立は緩和し、「両者はむしろ接近していた」との見解⁽³⁾がなされており、王政復古政府成立への政治過程を再考察し直す必要がある。

しかし、当該期を再考察する際、二点の課題が残されている。

第一に、当該期の政治過程において重要な役割を担う公議政体派を主体とした研究成果の不足である。従来の研究は倒幕派や徳川勢力の視点によるもので、公議政体派の動向はその中心人物である後藤象二郎の動向や各藩の特徴的な動向を部分的に組み込んでいるにすぎない。⁽⁴⁾

第二に、各勢力の政治過程を連続的にとらえるという視点である。各勢力の対立関係が一貫して高まり続けていったという単線的な見方ではないという見解をふまえて考察するには各勢力の政治動向や関係性の変化をきめ細かに考察する必要がある。しかし、先述のように公議政体派の動向は断続的なものにとどまっている。

以上の課題をふまえ、本稿では公議政体派のなかでも主導的存在であった越前藩を対象とし、越前藩の視点から中央政局を再考察すると同時に越前藩の動向を中央政局における周旋活動から検討していく。⁽⁵⁾

二、春嶽再上京時の中央政局と今後の行動方針

慶応三年十一月八日、松平春嶽が再上京する。この春嶽の再上京は、大政奉還上表以後の中央政局の急激な変化にとまない、幕府や朝廷をはじめ各方面から再上京要請がなされたためであった。

上京した春嶽及び越前藩に対し土佐藩土福岡藤次から中央政局の情勢が報告される。福岡をはじめ後藤象二郎・辻将曹らは、慶喜の大政奉還に協力し公議政体の樹立の実現に向けて尽力するいわゆる「公議政体派」の構成者であった。福岡の報告から春嶽上京時の中央政局の情勢とそれに対する春嶽及び越前藩の反応を見ていく。

まず、徳川勢力について福岡は次のように報告している。

此度内府公御反正之思召立、稀世之御英断に而、方今之御美事に相運ひ候處、御三家并御親藩内に而も、今一度幕威を被復度杯之議論も有之哉に而、種々之浮説流言も有之に付、夫等之先入、御當方様御聞込無之已前に、實際運御聴、御疑惑不相生様相願度と、同志一同申談罷出候由に而、頃日來之事情申立候件々⁽⁶⁾

慶喜に反正の意志があるとする一方、復権を望むいわゆる徳川保守派の存在を危惧し、徳川保守派の浮言流言が春嶽の耳に入り疑惑を生じないようにとこの報告をするに至った。彼等の春嶽への同盟者としての期待がうかがえる。⁽⁷⁾

徳川勢力の状況に対し、討幕派の状況はどうであったのか。春嶽及び越前藩も討幕派の動向が気になるようで、「越前表杯へ相聞候は、討幕論盛に相成、幕に而も敵對之聲息有之との實否如何」と質問している。これに対し福岡は、「其通り相違無之、實に危殆之形勢に相迫候事候得共、御反正之御英斷に而一時に消沮に及び、實は浮浪之徒過激輩は失望之由、乍併只今之浮説旺盛相成候へは、暴黨又々時を得、屯集之場へ可相運歟と甚心痛之由」と、慶喜の大政奉還によって討幕派との表面的な対立はないが今後の動きを注視している様子がうかがえる。このような中央政局の情勢をふまえ、福岡らは春嶽に次のように今後の見込みを伝えている。

扱今後之見込は、何れに議事院を開らき、上院下院を分ち、上は攝政公初内府公御主宰に而、明候御加り、下は諸藩士より草莽輩迄も出役に相成、何分皇國之國體如斯と御決定有之迄之事に而、大體之處は程も可有之事候へは、有名諸侯さへ御會同に相成候は、其處に而篤と御決議有之、御簾前に而御誓約有之、御確定之上、外諸侯へは如何と御垂問、缺席諸侯へは朝廷より御通達位之事に而相濟、違背之者は御追討と申程成正大公明之御基本相立不申候半而是相成申間敷との義は、内府公へも申上、至極尤に思召候との御沙汰候⁽⁸⁾

福岡らによる今後の政策に対して慶喜も同意していることもわかる。

福岡によって中央政局の情勢を報告された春嶽及び越前藩であったが、この報告を安易に受け入れたわけでは

ないようである。その背景には前回福井へ帰国することになった際の幕府、特に慶喜への不信感と後藤による大政奉還建白運動への疑念があった。¹¹⁾ そのため、春嶽及び越前藩は福岡の報告だけでなく、永井に徳川勢力内の様子を直接確認し、慶喜とも直接面会することでその真意を見極めようとしている。その結果、「仰之次第實に非常之御英断、奉感服候より外は無御座候」と慶喜に対し高い評価を示し、反正を確信するにいたった。

その一方、中根雪江が板倉勝静と面会し、不満と当惑の様子を確認している。¹²⁾ 徳川勢力内で慶喜に近い立場である板倉でさえ、大政奉還による急激な転換に対して冷静に慶喜の真意を理解できる状況ではなかった。

このように、再上京した春嶽及び越前藩は、大政奉還と其後の公議政体樹立の実現を目指していた福岡らから中央政局の情報入手し、幕臣や慶喜自身との面会を通してその情報の事実確認を行った。特に慶喜による大政奉還に関しては春嶽自身が慶喜と面会することで、慶喜の反正の真意を確認した。¹³⁾

しかし、板倉など幕府内で慶喜の真意が理解されておらず、春嶽と中根との間で今後の行動方針が話し合われ、「公」（引用者注―春嶽）御帰殿之上の御説に、内府公（引用者注―慶喜）皇國之安否を洞見、此他に處置無之と御英断有之候御深意を、伊賀始十分徹底無之、唯止む事を得ざる時勢に出候様に心得たるは、何とも慨歎至極せり、伊賀始如此卑見を匡正せん事、余か當然の任なりと御談論被為在たり」と、今後越前藩は徳川保守派の説得と慶喜の考えを理解徹底させていくことに重点をおいて周旋活動を行うこととなった。

三、薩摩の内情と「兵力論」

徳川保守派への周旋を開始していた越前藩に対し、薩摩藩内の状況が薩摩藩士吉井友実からもたらされた。

内府公一時之御英斷に而激徒屏息致候得共、散走致たるには無之、會議之上御実行の見はれ候を同居候形勢故、唯案勞致候は、内府公之御腹心にて、實に政權に執着無之は永井計にて、松山（引用者注「板倉勝静」）以下には必復古之臆念有之歟との嫌疑有之、萬一左様之事と相成時は忽地再亂に而、譯もなき事に可相成勢なれば、早速大綱領を御議定有之、夫に背く者は討つて取る外には無之見込之由¹⁷⁾

この時期の薩摩藩は大政奉還を行った慶喜への高評価により対立関係は表面化していなかったが、今後再び討幕の氣運が持ち上がる可能性もあった。これを左右するのは板倉以下徳川保守派の反正であり、彼等の復権の動きを抑えるためにも速やかな大綱領の決定を求めていた。そして、徳川保守派の動向次第では「討つて取る外には無之」との姿勢であり、越前藩土青山小三郎の「多人數登京之由、御先供勢にも有之哉」との質問に対し、「如何にも先勢に而追々參着せり、實は途中に居たるも有之」と兵の上坂も明らかにしている。薩摩藩は徳川側が反正となれば「急度御助申上ル」が、「御本反り等之事有之候ハ、夫切」という判断基準のもと、そのどちらにも備えていた。¹⁸⁾ 薩摩の動向は徳川保守派の動向次第で大きく変わる可能性を秘めたものであった。

吉井の情報から薩摩藩の徳川保守派への疑念を知った春嶽及び越前藩は藩邸會議において、

外藩之形勢、内府公には疑念無之候得共、中間に疑ひ有之、夫よりして前途曖昧の事と相成候而は、内府公之御反正も徒善と相成、忽討幕之にも至り可申、其節に及んでは、御處置甚御困難之事に可相成候へは、唯今之内板倉殿始反正、動揺無之様取固め置無之而は難相成義¹⁹⁾

と、今後も板倉はじめ徳川保守派の反正を求める周旋を行い慶喜の反正のもと徳川勢力の意志統一を図るとの方針を決めた。これ以降の徳川保守派への周旋活動は同時に薩摩藩の動向に対応するためのでもあった。

しかし、徳川勢力の意志統一は厳しい状態であった。その一因として慶喜の反正に対する解釈に加え、「兵力論」に対する考え方の違いにともない解釈のズレが拡大・複雑化したことが挙げられる。

この「兵力論」とは、諸侯会議開催の際、兵を率いて参内するかどうか、諸侯会議において軍事力を背景に用いるか否かなど、諸侯会議と兵力を率いた上京の賛否、さらには兵力を利用する意図に対するとらえ方である。

例えば、徳川保守派では渋沢成一郎が公議に反対する諸侯が兵力を使って強引に事を動かそうとする可能性を示唆し、そのような場合に備えて兵力を備える必要性を唱えている。²⁰¹この点については渋沢が薩摩との対立関係を意識し、薩摩に対抗して増強すべきと永井に対し要求していることからもうかがえる。²⁰²

これに対し永井は「薩も味方なり、少しにても多人敷引入候事は歡ふへき事」²⁰³との認識であったため、「御反正ハ勿論、何分其処ニテ皇国御政体ヲ御願被成候思召、尤兵力不用也」²⁰⁴との考えであった。

しかし、一方で永井は、「幕へ兵力ハ不用歟と御尋ニ候へハ、御召連御尤ト云也。何分是テ行ルヘシト思フ。」²⁰⁵とも答えている。兵力は用いないとの発言にもかかわらず諸侯の率兵を認めている。これはどういうことなのか。

そこには徳川勢力内の厳しい状況が背景にあった。渋沢をはじめ兵力の増強などを求める者が多くおり、彼等は慶喜の反正を誤ってとらえていた。このような状況に対し意志統一のために集議を行ったとすれば、その結果（おそらく徳川保守派が多数派となるだろう）を実際に行動に移さなければならぬ。そのため、異なった認識で慶喜の反正をとらえさまざまな説を立てている現状においても大筋が同じ考えな者をそのままにしていたことで少しずつズレが生じ、それが拡大・複雑化し対応が困難となっていた。²⁰⁶永井の率兵を認めたのもその一例で

ある。そして、内からの統一は困難と考えた永井は、慶喜の「御見込書」をふまえた諸侯会議によって大略を決め、それを輿論とする事で徳川保守派の行動を抑えることを期待した。²⁶⁾

このような「兵力論」に対し、春嶽は心痛の様子を国許へ送っている。²⁷⁾ 越前藩としては兵を一切用いないとの「兵力論」であったため、このような幕府内のズレの要因として慶喜・永井を「今後之御目途も粗御瞭然」と批判している。²⁸⁾ しかし、慶喜への高評価は変わらず、今後も保守派への周旋を続けていく。

四、諸侯会議即時開催へ向けて

徳川勢力内の意志統一への厳しい現状に加え、新たな問題が浮上する。薩摩藩主島津忠義の率兵上京である。

先行研究では、この率兵上京に小松帯刀が同行していないことから公議政体派が諸侯会議即時開催へ向けて周旋を開始していく過程を明らかにしている。²⁹⁾

しかし、越前藩の視点で当該期の政治過程を考察すると、諸侯会議即時開催に向けての周旋が小松不同行のみを要因とするという単線的な過程ではないことが明らかになる。

薩摩藩主の率兵上京に対しまざまな憶測が飛び交うなか、越前藩は吉井と面会し内情を入手しようとする。

先述の吉井からの情報のとおり、薩摩藩は徳川保守派の反正を判断基準としてどちらにも備えていた。今回の藩主率兵上京は明らかに京都における軍事力の強化を表しており、吉井など在京藩士が徳川勢力への対立姿勢へと比重を置き始めたこととらえても不思議ではない。吉井自身、「上様におゐては可奉疑様は無之、永井殿杯も御同様之由候得共、只板倉侯等には、矢張久變之心底有之哉にも疑ふ者有之」と、いまだ板倉以下の疑念が取り払われていないとの認識であった。そのため、吉井は「兎角御手後れに不相成様、來月十四五日頃迄には、大綱丈

けは御居りに相不成候而は不相適、いつれ之道にも此度之機會を失ふ時は、土崩瓦解」と、手遅れにならないようにと強く述べ、早期の諸侯会議開催とその前提となる大綱領の決定を求めた。⁶¹⁾

今回の藩主率兵上京を危機的な状況ととらえ焦っている吉井の様子を確認した春嶽および越前藩は、後藤・福岡・神山左太衛ら土佐藩士と今後の対策を話し合った。

ここで後藤から提起されたのが、諸侯会議即時開催構想である。⁶²⁾これは、在京の諸侯だけで早急に会議を開催し、政体を樹立することで薩摩藩の行動を規制しようというものであった。そして、諸侯会議即時開催へ向けて、まずは同盟諸侯で方針を固め、その後で朝廷内へ入説し上京諸侯を召集して諸侯会議を行おうとした。この方針で行動することを決定した越前・土佐・芸州は、それぞれ親交が深く公議政体派へ加わる可能性のある藩に周旋を行い勢力を拡大させていった。越前藩では、尾張・肥後そして永井へ周旋しそれぞれ同意を取り付けた。⁶³⁾

その一方で越前藩はこれまでと変わらず、板倉以下徳川保守派への周旋にも奔走していた。薩摩藩主率兵上京への対応としての諸侯会議即時開催であるが、率兵上京した背景には徳川保守派の反正の様子が変わりにないことが考えられていた。つまり、薩摩の行動そのものを抑えるためには根本となる徳川保守派の反正が必要不可欠なものであった。加えて、長州の上京という情報など討幕派の徳川勢力の反応をみる態度とそれに対する会津藩の対応が危惧されていた。⁶⁴⁾

このような状況に対し、慶喜側近の梅沢孫太郎との会話から徳川保守派で周旋の困難な藩（「見込違ひ藩々」）を集め十分徹底するまで議論に及ぶという構想が浮上する。⁶⁵⁾越前と幕臣とで徳川勢力内の反正の意志統一をはかる場を設け、この問題に一気に片を付けようとした。

これ以後討幕派による王政復古クーデター計画とその決行もあり、この「見込み違い藩」会議の開催はうやむ

やになってしまったが、この時期越前藩は諸侯会議即時開催と「見込違い藩」会議開催を並行し同時進行で周旋していかうとしていた。これら二つの会議構想はどちらも薩摩藩の行動に対応したもので、その背景には薩摩藩の徳川保守派の反正次第という判断基準があったためであった。

五、おわりに

以上、王政復古政府成立直前の中央政局における越前藩の動向を考察してきた。越前藩の視点で当該期の中央政局を考察していった結果、明らかになった点をまとめると次の通りである。

第一に、再上京してきた越前藩は当初から公議政体派として慶喜による大政奉還のもと公議政体樹立の実現に協力したのではなく、自身で慶喜はじめ徳川勢力や土佐藩士と直接面会することで、彼等の真意を確信し協力するに至った。その背景には、前回の帰国の要因となった幕府、特に慶喜への失望感と在国中の後藤の大政奉還についての疑念が依然として残っていたことがあった。

第二に、中央政局における越前藩の周旋活動は、徳川保守派への慶喜反正のもとでの徳川勢力の意志統一を重視した。その背景には、薩摩藩の徳川保守派の反正次第という徳川勢力に対する判断基準があった。越前藩の徳川保守派への周旋活動は、徳川勢力の意志統一だけでなく薩摩藩への対応という観点からなされたものであった。

第三に、当該期の徳川勢力は慶喜・永井らと徳川保守派との間で慶喜の反正に対する解釈と「兵力論」の考え方の違いにともない大きなズレが生じ、永井らもそれを認め妥協することで拡大・複雑化していった。これが王政復古政府において慶喜の政治参加が目前となりながらも鳥羽・伏見の戦いへと至ることとなった要因のひとつである徳川保守派の暴発へとつながっていくと考えられる。

第四に、諸侯会議即時開催について、これまで後藤と討幕派との関係から小松の不同行が要因とされていたが、越前藩の視点から考察することで、小松不同行のみが要因ではなく率兵上京に対する吉井の焦りの様子があり、その背景には永井の諸侯会議による大略の決定案や吉井からの徳川保守派次第という薩摩の判断基準などこれまでの一連の周旋活動のなかでなされたものであることが明らかになった。

越前藩からの視点で一連の流れを重視して連続的に考察することで、あるひとつの行動の決定に対する要因は決して単線的なものではなく、複線的にいくつもの要因を重ねその行動に至ったということが明らかになった。

その後、討幕派により王政復古へ向けたクーデター計画がもたらされるが、それについては別稿に譲りたい。

註

- (1) 「王政復古政府」は原口清氏による見解である。原口氏は、王政復古によって成立した新政府について、そのクーデターが武力倒幕派と公議政体派との合作によるものとし、後の維新政府と区別して「王政復古政府」と呼んでいる。また、高橋秀直氏も原口氏の見解をふまえ、「王政復古政府論」(『史林』八六巻一号 二〇〇三年)など一連の研究において当該期の政治過程やその政府内の構造についての考察も行っている。本稿でも原口氏の見解に依拠し当該期を「王政復古政府期」と呼ぶこととする。
- (2) 高橋秀直『幕末維新の政治と天皇』(吉川弘文館 二〇〇七年)、「王政復古政府論」(『史林』八六巻一号 二〇〇三年)、「薩摩倒幕派と『公議政体派』——王政復古クーデター再考——」(『京大学文学部研究紀要』四一号 二〇〇二年)、「王政復古の政治過程」(『史林』八四巻二号 二〇〇一年)
- 家近良樹『幕末政治と倒幕運動』(吉川弘文館 一九九五年)
- 原口 清『原口清著作集』 王政復古への道』(岩田書院 二〇〇七年)、「王政復古小考」(『明治維新史学会報』第三七巻 二〇〇年)
- (3) 高橋秀直『王政復古政府論一』(『史林』八六巻一号 二〇〇二年) 三三六頁
- (4) この点について、例えば高橋氏も新政府側からの限定的な考察にとどまっている。それは、次の発言からも明らかである。

〔引用者注〕討幕派と徳川勢力の關係が融和から対立へと變化した問題の解明には、京都の新政府と大坂に退去した徳川勢力の双方の分析が必要であるが、本稿では指数の關係で対象を新政府にとどめざるをえない。(高橋氏前掲論文 三六頁)

(5) 当該期の越前藩の政治過程を考察する際、「周旋」という言葉は越前藩の政治活動の特徴を示す重要なキーワードである。

「周旋」とは、「売買・雇用などで中に入って世話をすること。取持ち。斡旋。」「國際法上、第三国が外部から紛争当事国の交渉を援助すること」といった意味を持つ。まさに当該期の越前藩の政治活動はこの意味そのものであり、管見の史料でもしばしば「周旋」という言葉が用いられているためこの用語をそのまま使用する。

(6) 「丁卯日記」二二三頁

(7) 芸州藩士辻将曹は春嶽の上京を「此度御上京有之、同志大に副望之趣申達之」(「丁卯日記」二二六頁)と述べ、幕臣永井尚志も「大蔵大輔様御上京は、殊之外御待兼之御義に而、いつれに何角も御談可被遊、就而は今後之御見込も可被為在、何分早速之御上京御満足之由」(「丁卯日記」二二七頁)と春嶽の上京を待ちかね、早速の上京を喜んでいる。

(8) 「丁卯日記」二二六頁

(9) このような討幕派との關係の變化について高橋氏は「クレーター直前、両勢力は対立を激化させていたのではなく、接近しつつあったのである。」(『幕末維新の政治と天皇』三九一頁)と述べている。

また、尾張藩の成瀬隼人正が洪沢成一郎に対し「討幕之論盛んに、時機殆切迫に至り候も、政權を御歸朝ありしかは、群議喧囂寂然と相成候」(「丁卯日記」二二八頁)といい、春嶽は国許へ「此度土藩尽力より芋藩之姦策已二破れたる形勢なり」(『松平春嶽末公刊書簡集』七五頁)、伊達宗城へは「内府公之反正無疑事と相成、薩士藝も敬服、輔贊内府公せんとの趣也」(「丁卯日記」二四〇頁)と伝えている。

また、朝廷内でも正親町三条実愛が「一幕虚心不疑のこと。一諸侯上侯は宜きのこと、一薩以兵せにはならぬ説、上に而をさへのこと」(「嵯峨実愛手記」三一頁)と、慶喜側の真意を確信し、薩摩側の兵力での行動がおさえられた状態が見て取れる。

(10) 「丁卯日記」二二五頁

(11) 拙稿「大政奉還前後における越前藩の政治動向―春嶽帰国・上京問題―」(『法政論叢』第四六卷第一号 二〇〇九年)参照

(12) 「丁卯日記」二二六頁

(13) 同右 二二七頁

(14) 同右

(15) 「慶喜の反正の真意」とはどういうことか。まず「反正」とは「正しい状態へかえる、かえすこと」である。高橋氏が「慶喜の大政奉還の政体論は、幕府を否定することで二重政権を解消するとともに、現存する朝廷を改革し、天皇のもとに公議機関を中心をしめる政体を新たに樹立しよう」（『幕末維新の政治と天皇』三八一頁）としていたというように、慶喜が大政奉還によってこれまでの幕府を自己否定し、朝廷への政権の一元化を行ったことが反正とみなされたのである。

当時徳川保守派を除く政治勢力が公議政体の樹立を目指しており、慶喜の大政奉還の意図も諸勢力と同様であることから、「反正之卓識確乎たる事に而、幕私運而抛却、幕権を歸する朝家」（『丁卯日記』二四〇頁）と反正の様子を越前側に判断させた。次に「真意」とは慶喜がどういう意図のもとに大政奉還を行ったのかという事である。先述のように慶喜は朝廷への権力一元化による公議政体の樹立が目的であったが、徳川風説や保守派の志向から復権そして徳川絶対主義への志向も考えられ、慶喜自身の真意はどちらなのかということが他勢力にとって見抜かなければならない判断内容であった。

つまり、慶喜が「これまでの幕府を自己否定し、朝廷へ政権を一元化し公議政体の樹立を目指すことを策謀なく考えていた」ということが「慶喜の反正の真意」であった。

また、春嶽及び越前藩はこの時点で慶喜への疑念は水解したが、もうひとつの後藤さらには土佐藩の大政奉還に対する疑念は依然として残っていた。永井へ後藤について尋ねており（『丁卯日記』一三三頁）、十六日には侍座同席のもと春嶽が福岡と直接面会し、情勢を尋ねている。この面会で春嶽は「惣而會得被為在、侍座が「大に安心の趣」となったことから、逆説的にいえば、春嶽自身はこの時まで少なくとも福岡の発言に対して信用することができていなかったといえる（『丁卯日記』一三三頁）。さらには、二十二日の伊達宗城への京都情勢の報告書の中で「公明正大之尊慮、先日御書付之通り、在國中聊疑念も有之候得共、水塊之事と相成、實に富夏謁見之時とは、御見識如洗、為天下榮幸雀躍之至」（『丁卯日記』二四〇頁）と伝えており、少なくともこの報告書の時点でようやく在國中の疑念のすべてが水解していることがわかる。

(16) 「丁卯日記」二二八頁

(17) 同右 二二九頁 同様の内容が『越前藩幕末維新公用日記』四三四頁にもある。

(18) 「丁卯日記」二二九・二三〇頁

(19) 同右 二三〇頁

(20) 同氏（引用者注「渋沢」）の立説は、御三家御家門大憤發して兵威を盛んにし、抵抗力を以御盛意之貫徹すへき様に御手傳申上る事、此節之急務なれば、先つ尾越におゐて人数引寄せ、味方を鼓舞する時は、御普代之面々も大に力を得、同心戮力御盛業を輔贊するに至り候は、外諸侯は恐るゝに足らず、往日は已に兵力を以迫り奉り私説を遂る未故、此後も同轍ならん事は、追々人数練入之手段にても現然たり、畢竟幕を初親藩之威力衰弱より、如此體態にも立至りたる事なれば、此度奮激せずして何時を可期すへきと、切迫激勵之説得甚敷（「丁卯日記」二二二頁）

(21) 畢竟薩兵を選任繰込めは、此方にも千人之心當可致（「丁卯日記」二二二頁）

(22) 「丁卯日記」二二二頁

(23) 『越前藩幕末維新公用日記』四三五頁

(24) 同右

(25) このような徳川勢力内の状況は永井の「處々より色々之事可入御聴、就中公邊よりも聞へ可申、其説も異同可有之候間、一偏に御聴泥み無之様致度、兎角眞之御主意を不相心得、中邊より説を立候故、御盛意々々と申しながら、少々つ、意氣違ひ有之、夫を一筋にせんとすれば、辨論而已手戻りに相成候故、先つ大違ひ無之事は其儘に而任せて、夫々に引立置候事故、無是非少しつ、齟齬に相成候而被困候由」（「丁卯日記」二二三頁）との発言からもうかがうことができる。

(26) 先つ大體之處は、粒立諸侯會集之上に而、上様之御見込書を御奏聞に而、夫を衆議に被懸候様被仰上、扱衆議之上、彼之善は無御固執御隨順に相成候へは、夫に而大略相決し可申、天下之見る處、其様に變りたる事可有之様も無之候得は、大同小異に而相定り可申と存候、夫か大綱に而、已下之細目は追々之事に可有之、何卒當年中其邊之埒明候様致度心算之由、夫より枝葉之事は追々之事なるへく、先大綱領さへ相定候へは一と安心と申もの也、（「丁卯日記」二二二・二二三頁）

(27) 兵力論ニついても殊之外心痛ニ候（『松平春嶽未公刊書簡集』七五頁）

(28) 渋沢の兵力についての質問に対し、「一人モ不召連」（『越前藩幕末維新公用日記』四三五頁）と答えており、その後この姿勢を崩していない。王政復古クーデターの様子を国許へ伝えた書簡にさえ、「尤決而此上人数等差越され候ニ不及」（『松平春嶽未公刊書簡集』七八頁）と伝えている。

(29) 「丁卯日記」二三四頁 また、中根も「此に至つて分明之定説なし」と述べている。（「丁卯日記」二三七頁）

(30) 例えば、高橋氏は次のような見解を示している。

「小松の不在を後藤は、小松の平和路線が敗北した現れと見、危機感をもった。その結果、後藤は、薩摩が強硬路線に出る前に、早急に新政体を樹立する必要があると安が得るようになり、新たな構想を打ち出す事になったのである。」（『幕末維新の政治と天皇』三六〇・三六一頁）

実際、当時の薩摩藩内の中央政局での主導者であった大久保一藏・西郷吉之助・小松帯刀の關係についての一般的な見方は平和路線の小松と強硬路線の大久保・西郷が対立しているというものであった。そして、今回の小松不同行は小松が国許で強硬路線に敗北した結果であることを表していることととらえた。

(31) 「丁卯日記」二四二頁

(32) 以下、後藤による諸侯会議即時開催構想についての内容は「丁卯日記」二四三頁。

(33) 「丁卯日記」二四四頁

(34) 中根と梅沢は長州の上京との情報に対し、「長之舉動は、幕之動静を試るの施策」（「丁卯日記」二五〇頁）と判断している。

しかし、長州が上京すれば京都守護職松平容保のもと京都の警備にあたっている会津藩との武力衝突の危険性もあった。

この時期会津藩は朝廷内へ積極的に入説しており、「會は在京諸侯参内被命朝議に相成候様尹宮へ入説、宮も御同意歟候」（「丁卯日記」二五一頁）と、特に会津―尹宮ラインは強力であった。このような復権を目指した朝廷への入説と朝議への介入に対し、「會津兩藩より、御同意無之様迫つて入説有之故之事に而、外之公卿方も迫りに來らんかと御恐怖甚敷由」（「丁卯日記」二五三頁）と、近衛忠房が危惧するほどであった。

(35) 「丁卯日記」二四九頁